

関西の人材力を 検証する

地域社会の持続的発展に不可欠とされる人的資源。
幾多の時代や社会変化を超えて、独自の歴史的風土と
文化・生活様式を守り、伝え、磨きあげ、多様な人材を育ててきた関西。
そのユニークな人材力の秘訣を考えるため、各地の現場を訪ねてみた。



ドアのないオープンな空間で授業を行う福井市の至民中学校。
この日は2011年度入学予定の小学6年生向けに、英語科の
体験授業が開かれていた

「少人数授業」と「業間体育」

「この問題わかる人いるかな?」。先生の問いかけに、子供たちが一斉に手を挙げる。当てられた男の子は、嬉しそうに電子黒板の前に立ち、分数の足し算をすらすら解いた。授業と授業の間の休み時間には「業間体育」。二時限目が終わると、子供たちは縄跳びを手に廊下や体育館へ飛び出していった――福井県永平寺町の志比しひ小学校は活気に溢れていた。

福井県は文部科学省が小・中学生を対象に実施する「全国学力テスト」「全国体力テスト」でもとにトップクラスを誇る。その原動力の一つが、少人数授業と業間体育だ。県内の小学校では、一クラス三十一人以上になると、一・二年生は担任と低学年サポート教員を、三年生以上の算数・理科などではチーム・ティーチング（T・T）として二人の教員を配置し、きめ細かな指導を行っている。志比小学校校長の宮下洋一さんは「教員は特に学力下位の子供が理解できるよう指導しています。でも、実はそこよりちょっと上の成績の子供たちの中に、授業をうまく理解できていない子供がいることがある。T・Tや少人数の授業だと、その層にも目が向きます」と効果を話す。

一方、業間体育については「スポーツ少年団で日々運動する子供とまったく運動しない子供との二極化が進むなかで、学校で毎日、一緒に汗を流すことは体力増強にとっても効果的」だそうである。

これらのきめ細かな学校教育の背景には、福井県が六十年近く続ける独自の学力テスト、体力テストがある、と福井県教育長の広部正紘ひろべ せいこうさんは言う。県や市町村の教育委員会が毎年テストを回収、採点し、分析。その結果を各学校に返し、学校現場で児童生徒の弱点強化を進めてきた。「教育委員会の職員自身が採点するからこそ、弱点に気づきやすい」と、広部さんは話す。

学校・地域・家庭が一体となった教育

「福井では教育行政と学校現場が協力して改善方法を考え、各学校の教員が実情に応じた形で教育活動を行ってききました」と言うのは、二〇〇八年春に新築移転して開校した福井市の至民しみん中学校校長の塚田雅洋つかだ まさひろさんだ。同校では、新築移転にあたり、現場の声を生かした新しいスタイルを導入。生徒が教科ごとに専門教室

に移動して授業を受ける「教科

センター方式」と、全学年

の生徒を縦割りに分けて学

校行事や総合的な学習を行う

「異学年型クラスター制」を県

下で初めて採用したのだ。

至民中学校のもう一つの特色

は「地域連携」で、多くの地域ボ

ランティアがいる。全国各地から

見学に訪れる教育関係者の案内など



- ❶冬、雪に閉ざされる福井県では、授業と授業の間の「業間体育」で全校児童が廊下や体育館で縄跳びなどに汗を流す。永平寺町の志比小学校にて
- ❷県内の小学校では、地域ボランティアが下校時の安全を守る「見守り隊」を結成。福井市の旭小学校では低学年対象に約80人が活躍
- ❸ノーベル賞学者・南部陽一郎博士や漢字・文字学の第一人者・白川静博士など福井に関わりの深い学者の業績を積極的に教育に生かしている、と語る福井県教育長の広部正紘さん。県内の小学校では、漢字解説本『白川静博士の漢字の世界へ』を活用
- ❹志比小学校の3年生たち

学力・体力トップクラスの教育力

福井



“学力トップクラス”を支える少人数の授業。永平寺町の志比小学校3年生の算数の授業では1クラスを2つに分け、14人で行われていた



心学明誠舎が主催する定例早春セミナーには、石門心学の思想や石田梅岩の考え方を学ぼうと50人ほどが訪れた

よき企業人を育てる、石門心学の倫理観

先見的な「顧客満足」の経営思想

「お望みの方は遠慮なく、女中方は奥へ」。江戸時代の改革期であった享保期（一七一六～三六年）に、石田梅岩が提唱した石門心学の講席の軒端には、こう書かれた招き行燈が出されていた。厳しい身分制度のなか、梅岩はすべての人に学ぶ場を無料で提供した。その講席には、商家の主人や番頭、女性や子供など、多くの人々が詰め掛けたという。

梅岩は一六八五年、現亀岡市の農家に生まれ、京都の呉服商に奉公に出た。のちに、番頭にまで出世したが、その間、勉学に励み、四十代半ばで退職。自ら悟った実践的な人生哲学、商人道徳を、町人向けにわかりやすく説いた。やがて、多くの弟子が育ち、京や大坂をはじめ、日本各地に心学講舎が次々と誕生した。

どうして、町人をはじめ藩主に至る多くの人々が、石門心学に耳を傾けたのか。現在わずかに残る心学講舎の一つ、大阪の心学明誠舎副理事長の中尾敦子さんによると、貨幣経済が発達するなか、金儲けは賤しいこととさげすまれていた商人階層に、勤勉、正直、儉約を旨とし、「商人が売って喜び、相手が買って喜ぶ」、いわば顧客満足に徹して利益を得ることの大切さを説いたからだという。過度な利益ではなく、見合った利益を当然の権利と

も担い、教員を教育業務に専念させている。毎年、地域の人々が生徒と一緒に授業を受ける地域公開講座や、地域住民の絵画や彫刻、写真の展示など、地域の文化交流活動の拠点にもなっている。

このような地域連携は、福井県がこれまで培ってきた学校、地域、家庭の三位一体となった教育活動の風土から生まれてきた。広部さんによれば、どの小学校にも多くの地域ボランティアがあり、学校菜園の野菜づくり指導や低学年への本の読み聞かせなどに努めている。

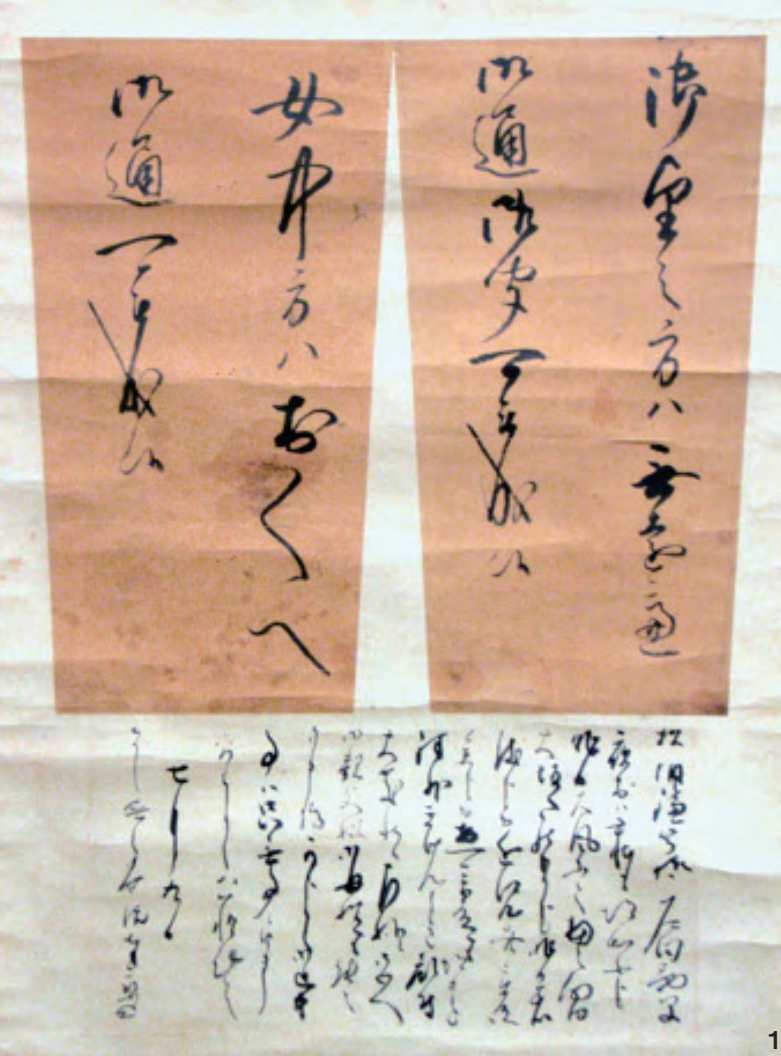
また、家庭も教育に熱心だ。三世帯同居率は全国二位で、宿題が他都道府県と比べて多いなど、家族が見守るなかで学ぶという習慣が定着。例えば、国語の音読学習は、家族が聞き、大きい声だったか、句読点で区切ったか、などを評価するという。「生活習慣をみても、福井県の子供たちは、早寝・早起き・朝ごはんをしっかり守っています。これは、家庭の躾が行われていることの証明です」と広部さん。今後は保育園・幼稚園から高校までの連携をより深めて、環境変化のギャップを小さくすることで、不登校を減らしたいと力を込めた。

もともと、教育熱心な地域・福井。江戸後期には名君として知られ、藩校を開設した福井藩主・松平春嶽など教育に尽力した先人たちがいる。彼らの精神を受け継ぎ、地域の未来を託す子供たちの教育に、全県民が一体となって取り組んでいるのが「福井県」である。



- ①至民中学校の体験授業の日、入学予定の小学6年生に向け、生徒たちが学校の特色をプレゼンテーションした
- ②至民中学校には、各教科担任が常駐する「教科ステーション」があり、生徒が気軽に相談に訪れたり、教員同士の打ち合わせも積極的に行われている
- ③開放的なつくりの至民中学校の校舎。校内には異学年型クラスターごとの垂れ幕が飾られている





大阪

①石田梅岩が軒端に出した招き行燈には、誰でも受講を歓迎した梅岩の思いが表れている。
 (右)御望之方ハ無遠慮 御通御聞可被成候 (左)女中方ハおくへ 御通可被成候 (提供: 心学明誠舎) ②心学明誠舎副理事長の中尾敦子さん
 ③心学明誠舎の定例早春セミナーでは、京都大学大学院教授の辻本雅史さんが石田梅岩の学問観などについて講義した

④⑦堺市戎之町の菅原神社境内には、1939年につくられた梅岩座像がある
 ⑤⑥関西商法の商道の伝統となって受け継がれる心学。大阪・船場の織維問屋街にて

一人、中尾さんの父で、経済学者の竹中靖一さんが普及に奔走。高度経済成長途上の一九六四年、竹中さんは「石門心学の経済思想」で学士院賞を受賞し、世間の心学への関心も高まった。そして八〇年代半ば、中尾さんが引き継いだ。周囲に「潰したらあかん。学問の灯は一回消したら、もうつかへん」と励まされ、細々と運営を続けた。

近年、急速にグローバル化が進むなか、ピーター・ドラッカーの経営理念に比較されながら、商売への自負と「顧客満足」「企業の社会的責任」の実践を説く心学が、日本の経済人の心の拠り所として注目されるようになってきた。もともと社訓や家訓に生かされていた心学。「道徳と商業を結びつけた心学は、関西商法の商道的伝統となつて大阪企業に受け継がれている」という声もある。

中尾さんは語る——「利益優先の世界で、大阪商人のなかに根づいてきた『お客さまに喜んでもらったら、自分も喜びを持つ』という梅岩の教えは近年、韓国、中国でも注目されています。大阪の企業人に大阪を支える仕事人としての誇りがあれば、グローバル時代を生き抜けるはず」だと。商人の町としての歴史を歩み、企業人の誇りを伝え、育ててきたのが「大阪」である。



それから三百年余り経った今でも、人々は心学を学びに足を運ぶ。大阪府立文化情報センター・さいかくホールで開かれた心学明誠舎の定例早春セミナーには、ネットワークを広げたいと考える中小企業の社長や商店主、若いビジネスマンなど五十人ほどの聴衆が来場し、熱心に梅岩の思想、生き方の話に耳を傾けていた。

心学明誠舎は一七八五年、大坂商人の三木屋太兵衛が開設し、現在は社団法人として大阪・難波に事務局を構える。経済人向けや一般市民向けのセミナーを開くほか、心学の歴史と思想、梅岩の考え方、生き方を伝える「心学道話」の語りや落語家の講話開催など、多彩な手法を用いて心学活動を行っている。

第二次世界大戦後には、戦後社会の人心の荒廃を憂えた教育者たちが、心学思想を取り入れようとした。その

して受け取る。それは武士の俸禄と同じだと梅岩は言い、身分制度や階級関係を超えた思想を示した。

中尾さんは、紹介者不要で、誰にでも受講を勧めたことが受け入れられた、とも指摘する。「梅岩はマックス・ウェーバーの百五十年も前に、倫理的な資本主義の重要性と平等思想を訴えていたんです」。江戸時代、天下の台所として日本を支えた大坂の経済人、町人に、とりわけ心学に傾倒する者たちが多かったのも当然かもしれない。

グローバル時代を生きる企業人の心の拠り所に

京都・祇園

芸を極める、花街の矚力

花街を支える置屋制度

「舞妓、芸妓として大切なのは心です。立ち座りや障子の開け閉め、お客さんとお喋りでも、心がこもってないと。相手の気持ちを察して、『この人、次こうしはったら喜ばはる』と思うことをするように」。祇園町の置屋の女将、松尾久枝さんはそう話す。例えば、部屋を出るときには電気を消す、お風呂を出るときには次の人のためにお湯を足すなど、普段の暮らしのなかで、さりげない心配りを積み重ねることが大切だと。

京都には五つの花街がある。なかでも花見小路を中心とした「祇園甲部」には、六十を超えるお茶屋があり、五花街のなかで最多を誇る約百人の芸舞妓がいる。

舞妓をめざす子は、置屋に仕込み（見習い）として住み込み、修業を積んでいく。「置屋さんの制度が、京都の五花街が今まで続いてきた根本だと思います。中学校を出た子たちを預かり、お稽古させ、京都弁を教え、躰る。舞妓ちゃんに出はるとなったら、衣装から何から損得抜きでつぎ込みはります」と言うのは、京都花街組合連合会会長の太田紀美さんだ。仕込みの期間が約一年。その後、舞妓になって四年間、さらに芸妓になって一、二年、年季が明けるまで置屋で苦業を共にする。

芸舞妓たちは、置屋の女将を「おかあさん」と呼ぶ。文字どおり、芸舞妓にとって、女将は育ての母。二十四時間、一緒に暮らすなかで、細かな心配りや作法を教えていく。「細々と言うことは大変やけど、気づいたらす

ぐ言います」と松尾さん。

また、舞妓としてデビューする前、同じ置屋出身の先輩芸妓（おねえさん）と姉妹関係を結び、以後、親身な助言、指導を受けていく。「お稽古してはっても、お茶屋での見習いでも、その子が怒られはったら、おねえさんが謝りに行かざる」と太田さん。芸舞妓にとって、「おねえさん」は「おかあさん」以上に厳しく、頼りとする先達であり、家族である。ちなみに、舞妓見習いで数カ月通う見習い茶屋の女将も「おかあさん」。この三人が「お見世だし」といわれる舞妓デビューの保証人となる。

独自の教育システムで芸事を磨く

ピンと張り詰めた空気の中で、芸妓が舞う。井上流家元・五世井上八千代さんが見つめるなか、一人の芸妓が口元をきゅっと結び、厳しい表情で稽古をしていた。

続いて、春に行われる「都をどり」に向けた稽古が始まった。色柄とりどりの着物に身を包んだ二十数人の舞妓を前に、井上さんは、名前を呼びながら、手の振り、体の動きなどを指導。ときには自ら実演したり、弟子の前に歩みより、手ずから稽古を付けていった。

「お座敷でついた舞の癖を女紅場^{にようば}でしつかり直していただいています」と松尾さん。祇園甲部の芸舞妓は、祇園で生きる限り、八坂女紅場学園で生涯学び続ける。芸の世界に終わりはなく、常に芸を磨くことが求められる芸舞妓たち。仕込みは舞踊のみで、舞妓になると、加え

て三味線などが必修

になり、ほかに芸

舞妓として知識を持つ

ていることが望ま

しいお花や書画な

どの稽古に励む。

芸妓は長唄などを

中心にさらに芸を

磨き、芸舞妓とも一科目につき月七

日間ほど稽古に通っている。伝統芸能の家元などが、基礎的な型を教えるが、「そのお師匠さんが近くにいてくれはるのはありがたいことです」と、学園理事長も務める太田さんは言う。こうした独自の教育システムで学び続けることが芸舞妓の成長を支えている。

太田さんは「京都の花街では、芸舞妓らを街全体、みんなの目で見守っています。その人が次どこに行かはったか、みんなが見ててくれてはる。だから足あとがわかるんです。これはほんまに幸せなこと」と目を細める。

桃山期にできた茶屋を起源とし、文化・文政期に花開いた京都の花街。そこで築かれる、厳しさを秘めた濃密な人間関係によって、芸舞妓独特の仕草、振る舞い、さらには生き方を、世代を超えて、育み、伝えているのが「京都・祇園」である。



黒紋付の「お引きずり」で歩く祇園甲部の芸妓

- ①八坂神社の節分行事では、祇園甲部の舞妓たちが奉納舞を演じた ②奉納舞のあと、集まった参詣者へ豆まきをする舞妓たち
③八坂女紅場学園では、井上流家元・五世井上八千代さん(右)の指導のもと、舞妓たちが「都をどり」の舞を稽古していた
④京都花街組合連合会会長の太田紀美さん ⑤祇園町の置屋「多麻」の女将・松尾久枝さん(左)は、夕方、お座敷に出かける舞妓に一声かけて送り出す

京都・祇園



1 3



2



4



5



- ①12月16日、おん祭の「大和土宵宮詣(やまとぎむらいよいみやもうで)」では、大和土と流鏑馬児(やぶさめのちご)が若宮へ参詣する
- ②おん祭の「お旅所祭」での春日大社宮司の花山院弘匡さん(手前)と権宮司の岡本彰夫さん(右端)
- ③興福寺南大門跡で行われる「南大門交名の儀」に臨む興福寺の僧侶
- ④「遷幸の儀」のあと、17日午前1時から「暁祭」が始まり、「社伝神楽」が奉納された

伝統継承へ、春日大社が守り支える人材力

奈良

祈りあるものは、千年、二千年と続く

二〇一〇年十二月十七日午前零時。春日大社の若宮から続く参道は、すべての灯りが消され、漆黒の闇と寒気に包まれていた。「チーラー」。地を這うような声が近づいてくる。何十人も神職たちが列をなし、警蹕と呼ばれる掛け声を発しながら通り過ぎていく。

若宮神が本殿からお旅所に遷られる「遷幸の儀」。その厳粛な空気に誰もが圧倒される。大和国第一の祭礼「春日若宮おん祭」のメインとなる一日が始まった。

おん祭は平安時代の一三六年、飢饉や疫病などが相次ぐなか、時の関白・藤原忠通が五穀豊穰、万民安楽を祈って始めたとされている。春日大社と興福寺、そして大和国中の、武士や農民、商人、芸能者など、さまざまな職種の人々が力を合わせて、守り、育て、伝えてきた。以来、一度も途絶えることなく、今回で八七五回目を迎えた。

なぜ、これほどの大祭礼を続けることができたのか。「それは祈りです。祈りあるものは、千年、二千年と続きます」。春日大社権宮司の岡本彰夫さんは言う。

例えば、祭礼の存続が危ぶまれた明治維新直後、廃仏毀釈などで資金難に陥ったときは県内各所から寄付を募ったり、また芸能者たちが、「それまで支給されていた出勤料のお米をいただかなくても参ります」と率先して祭礼に参加したという。

「みんなが努力し、みんなで幸せになろうという、日本の価値観がそこにはあります」と岡本さんは語る。神の加護への感謝の気持ちを祭という形で伝える。そのような祭礼に奉仕してきた幾世代もの人々の真摯な祈り、真心が、おん祭の神事、芸能として結実し、時代を超えて受け継がれてきた。

人づくりで、古代の文化、技術を伝える

十七日正午、「お渡り式」が始まった。「日使」を先頭に、巫女、競馬、流鏑馬、大和土、大名行列などが奈良市中心部を練り歩く。日使とは藤原忠通が祭に向かう途中に病となり、お供の楽人にその日の使いをさせたことに由来し、一九九八年から関西財界のトップが勤めている。大名行列などには県内の企業や自衛官、子供たちなども参加。八百年以上経った今もさまざまな人々の手で守られているといえるだろう。

日使など祭の参加者は、二週間以上前から、肉類やネギのような匂いの強い野菜などを食べることを避け、身を清めて祭に臨む。古代から受け継いだ祭礼の型や作法を変わず守り続けることで、次の世代もまた伝統を継承していく。「細かな点にもこだわる民族だからこそ、こんな古い姿が残り得た」と、岡本さんは言う。



例えば、春日大社の神楽には、年に一度、正月三日にだけ奉納される秘曲「神降ろし」の舞がある。「これは、簡素な舞やけど、古代の息吹きが込められている」と岡本さん。この神楽は、代々、ただ一人の巫女に伝えられてきた。

古代の息吹は社殿建築にも刻まれている。春日大社では二十年に一度、社殿などを修理する「式年造替」も一度も途絶えたことはない。二十年に一度だと、二十歳の息子が見習いで、四十歳の父が現場作業を担い、六十歳の祖父が棟梁として指導する。だから、貴重な大工の技と知恵、工夫を古代から現代まで連綿と伝えることがで



❶❷春日大社では企業や学校向けの研修も行っている。参加者は日本の伝統文化を肌で知り、時代や流行に翻弄されない姿を考える(提供: 春日大社)
写真下: 60回目の式年造替の一環として、2010年3月、国指定の重要文化財「直会殿」の屋根のふき替えが終わり、美しい桧皮(ひわだ)がよみがえった

学校と地域社会、家庭が密接に連携し、子供を育てる「福井」、江戸時代から現代に通じる企業人の基本理念を保ち、地域に発信してきた「大阪」、桃山期のお茶屋のもてなしの文化を極め、その心を育む「祇園」、太古から祈りの生き方を守り、人々の幸せを願い、連綿と伝えてきた「奈良」――。時代を遡ると、どの地域にも独自の歴史があり、伝統の灯を受け継いだ人々が、また次の世代へと伝えていた。子育てに力を尽くすのも、伝統の技を伝え続けることも、彼らにとってはごく自然で、誰もがしている当たり前のことなのだ。

ろう。この関西の歴史と風土が生み出した、ユニークな人材育成こそが、明日の地域発展の原動力となっていくはずだ。

【注】



きた。「式年造替の根底にある大事なことは、人を育て、技術を伝承する人づくりの制度」だと岡本さん。六十回目の節目となる式年造替はすでに始まっており、国宝の本殿の修理は二〇一五年に行われる予定だ。

「物を残しても、人を残さなかったら、何もありません。千二百年、コツコツと古代の姿を伝えてきたのが春日大社。これはお水取りを伝える東大寺でも同じです。神や仏に最高の礼を尽くすことが南都の悲願なんです」。古来の文化、技術に誇りを持ち、人づくりを着実に進めることで、伝統を守り、伝えてきたのが「奈良」である。